



甲虫ニュース

COLEOPTERISTS' NEWS

No. 35

(Oct. 1976)



日本産タマムシ科概説 (18)

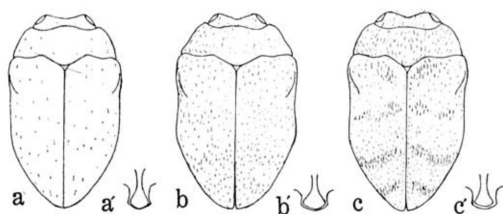
黒沢良彦

10. *T. pseudoscurobiculata* OBENBERGER, 1940
クロチビタムシ 分布: 日本 (本州, 九州), 中国。体長 2.4 mm 内外, 黒色, わずかに唐金色の光沢があり, 翅鞘には粗大な点刻を一面に散布する。一般に全く毛斑を欠くが, 九州産は翅鞘にごく不明瞭な, 暗い銀白色短毛からなる帯状の斑紋を現し, これを f. *shirozui* Y. KUROSAWA, 1959 と云う。この型は亜種として記載したものであるが, 私の検した中国湖南省新化県産の 1 頭もこれに似た傾向を示しており, 九州産の亜種とするよりは, むしろ型とした方がよいであろう。原産地は東京都高尾山であるが, 私は青森県八戸市, 山形県米沢市芳泉町, 福島県会津若松市吹矢山, 福岡県浮羽郡吉井町, 福岡市立花山, 鹿児島県佐多岬産の各 1 頭を検した。九州産の 3 頭はいずれも *shirozui* 型である。中部地方から中国, 四国地方にかけての標本を検していないので, 原型と *shirozui* との関係がはっきりしないが, ここでは一応後者を型として取扱っておく。極めて稀な種類でいつも 1 頭を偶然に見出すだけで, 数頭が同時に採れた例を知らない。有害植物も全く未知である。本種は系統的には日本産の他の同属の種類とは全く異なり, ヨーロッパ産 *scurobiculata* KIESENWETTER, 1857 などに近い。この種類はシソ科のハッカ属の植物の潜葉虫である。これ

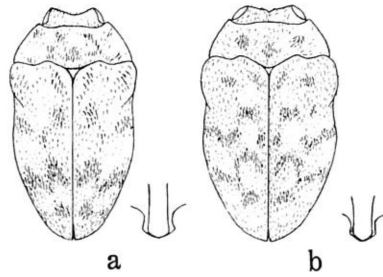
から推定すると, 本種もあるいはシソ科の草本を食べるのではないとも考えられる。私の採集経験も, 林中の陽の当る草地の地表をはっていたり, 山頂の芝地で休んでいる時に足にはい上って来たものなどで, 余り活動性がなく, どこにでもある植物に有害するものでもなく, 特別な草本植物につくのではないかと推定できる。

11. *T. reitteri* OBENBERGER, 1930 マメチビタムシ 分布: 日本 (北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬), 朝鮮, 中国。体長 2.4~3.0 mm, 暗い唐金色, 翅鞘の毛は暗褐色, 銀白色と褐色の毛からなる毛斑がある。体はやや扁平でヒラタチビタムシ属 *Habroloma* のものに似た形をしている。複眼の内側も隆線状に突出する。有害植物は主としてヤブマメであるが時にタンキリマメ, クズ, 大豆などにつくこともある。北海道南部から九州に至る地域に広く分布し, 稀な種類ではない。私は 1959 年に本種に当る記載が見当たらないので, ヤブマメの属名をとって *falcatata* と云う新名を与えた。しかし, 当時すでに中国産の標本を検していたので, 大陸から記載された種類ではないかと危懼していたが, OBENBERGER のコレクション中にある, 朝鮮の Cemulpo (鎮南浦) から記載された *T. reitteri* OBENBERGER, 1930 ライテルチビタムシの模式標本が本種に当ることを確めた。OBENBERGER のコレクションの中には他に上海, 福建省 Kuantung (官屯?) 産の標本があったが, 私も山東省青島, 朝鮮ソウル (京城), 雪岳山などの標本を持っている。なお, 台湾から記載された *T. taiwanensis* OBENBERGER, 1929 タカサゴチビタムシの模式標本も本種によく似ており, あるいは同種であるかも知れない。

12. *T. robusta* E. SAUNDERS, 1873 サンゲチビタムシ 分布: 日本 (本州, 四国, 九州, 伊豆諸島)。体長 3.6~4.6 mm, 大型で頑強, 前胸背の側縁はほぼ一直線を呈し前方に狭まる。上翅の毛斑は金褐色と銀白色とからなり, 地色は唐金色を帯びる。スダジイが唯一の有害植物で, 他のブナ科植



第 26 図 a. クロチビタムシ *Trachys pseudoscurobiculata* OBENBERGER b. スミレチビタムシ *T. violae* Y. KUROSAWA c. ヨシダチビタムシ *T. yoshidai* Y. KUROSAWA (黒沢, 1959)



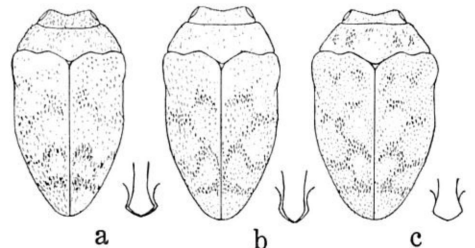
第 27 図 a. マメチビタマムシ *Trachys reitteri* OBENBERGER b. マルガタチビタマムシ *Trachys inedita* E. SAUNDERS (黒沢, 1959)

物にはつかない。この点オキナワジイのみにつくオオダンドラチビタマムシ *T. dilaticeps* GEBHARDT によく似ている。その分布も九州の西岸と南岸、四国の太平洋岸、和歌山県から伊豆諸島、房総半島に至る太平洋の地方に限られていて、大体においてスダジイの分布に一致している。伊豆諸島では新島、利島、神津島、大島など北部の諸島に産するが、それ以南の諸島からは記録がない。また、日本海沿岸地方の分布北限は福井県高浜町青葉山である。とにかく、本種の分布もオオダンドラチビタマムシと同様に黒潮と密接な関係があることは確実である。模式標本は LEWIS の第 1 回の採集品で、産地は原記載には Japan とあるだけであるが、ラベルにははっきり Nagasaki と明記してある。樹皮下で越冬することが多く、スダジイの近くにあるケヤキの樹皮下によく発見される。以前は京浜地方の市街地でもよく見かけたが、最近ではほとんど見られない。

13. *T. saundersi* LEWIS, 1892 ソーンダースチビタマムシ 分布：日本（本州，四国），中国，台湾。体長 3.3~4.4 mm，頭胸部は唐金色ないし真鍮色，翅鞘は黒色，わずかに青紫色を帯びることがある。毛斑はほとんど銀白色毛からなるが，時に会合部に金褐色毛を少々混ぜることがある。幼虫はウツギ，マルバウツギなどユキノシタ科の *Deutzia* 属の植物につく。本州中部に普通な種類で，北限は福島県などの東北地方南部，西は四国の瀬戸内側や中国地方で，どの地方でも少ない種類ではない。しかし，不思議なことに，九州産の標本は一度も見ることがない。私はかつて (1959) *T. obscuripennis* OBENBERGER, 1923 ウスグロチビタマムシを，その記載のみから本種のシノニムにしたが，その模式標本（京都産）を検した所，本種ではなく，THÉRY の 1927 年の扱ひの方が正しく，*T. minuta salicis* LEWIS, 1892 ヤナギチビタマムシであった。原産地は原記載に “Main island. Sixteen examples taken at various places on the Nakasendo.” とある通り中仙道沿いの数箇所であるが，大英博物館に現存する標本は Japan と云うラベルのついた模式標本 1 頭だけである。私の手許には小笠原母島 (15. viii. 1930) と云うラベルのついた標本が 3 頭

あるが，小笠原諸島には本種の食餌となるウツギ属の植物はおろかユキノシタ科の植物も全くないので，これは何等かの誤りか，日本本土から持ち込まれた植物についていたものと考えてよいだろう。従って小笠原に土着しているとは考え難く，その後の記録もない。今年 6~7 月の私の調査でも発見できなかった。台湾（恒春）から記載された *T. mariola* OBENBERGER, 1929 マリオルチビタマムシと中国の Kiulung から記載された *T. opsigona* OBENBERGER, 1937, Lilong から記載された *T. vimmeri* OBENBERGER, 1930, 雲南から記載された *T. jakovlevi* OBENBERGER, 1929 および香港から記載された *T. sororcula* OBENBERGER, 1929 は共に本種のシノニムと見做してよいであろう。また雲南から記載された *T. yunnana* OBENBERGER, 1929 も 2 頭ある模式標本のうち 1 頭は本種と同一種であるが他は斑紋が多少異なり，別種と考えられる。OBENBERGER の記載した種類は模式標本にただ単に Type と云う赤いラベルがついているだけで，この様な場合どちらを完模式標本とするか，後から指定する必要がある。中国では揚子江以南の山地に広く分布するらしく，私は江西省，福建省，広東省など各地産の標本をかなり検した。

14. *T. semenovi* OBENBERGER, 1929 キタドウイロチビタマムシ 分布：日本（北海道，本州），朝鮮，シベリア東部，満洲，中国。体長 3.0~4.2 mm，*T. cupricolor* E. SAUNDERS, 1873 ドウイロチビタマムシによく似ていて，以前は同一種と考えていたが，翅鞘が強く紫色を帯びていて翅端部のみ銅色，肩部の張り出しが強く，後方に強く狭まるなどの点で異なる。加害植物はハルニレであるが，大陸では何に加害するか知られていない。北海道から中部山地にかけて分布し，私の知る分布の南限は長野県軽井沢，関東山地から西の地方ではドウイロチビタマムシの分布域になるが，両者の分布境界がどうなっているのか興味がある。原産地は中国浙江省の寧波であるが，私は南京と杭州産の数頭の標本を検した。バイカルから記載された *T. pecirkai* OBENBERGER, 1925 は本種と同一である。またアムールから記載された *T. amuricola* OBENBERGER は翅鞘の白帯の様子が多少異なるが，本種の異常的



第 28 図 a. ヌスビトハギチビタマムシ *Trachys tokyoensis* OBENBERGER b. アカガネチビタマムシ *T. tsushimae* OBENBERGER c. コウジチビタマムシ *T. sp.* (黒沢, 1959)

な個体と見做してよいであろう。

15. *T. tokyoensis* OBENBERGER, 1940 ヌスビトハギチビタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州）。体長 2.3~3.1 mm, *T. reitteri* OBENBERGER マメチビタマムシに似ているが，やや頑強で，体は扁平ではなく，体色は真鍮色，時に剛鉄様の青紫色の光沢があるものがある。翅鞘の毛斑は淡黄金色毛と銀白色毛とからなり，褐色毛を混ぜない。小型のものでは一様に淡黄色毛で覆われ白帯が不明瞭になる。加害植物はヌスビトハギであるが，他の同属の植物にもつく可能性はある。東北地方南部から四国，九州の全域にかけて分布するが，それ程多い種類ではない。大陸では中国からインドシナ半島にかけてよく似た種類が幾つか記載されているが，詳しい比較が出来ないので，分布から除いた。チビタマムシ類としては珍らしく，陽の余り当たらない林の下草などについていることが多い。原産地はその名の如く東京である。1959年に私は本種の種名に *T. japonica* OBENBERGER, 1923 を当て，北隆館の原色昆虫大図鑑でもこの名を使ったが，これは誤りで，*japonica* の模式標本は *T. tsushimae* OBENBERGER, 1922 アカガネチビタマムシ，即ち，私が *T. inedita* としていた種類と全く同一で，本種ではなかった。

16. *T. toringoi* Y. KUROSAWA, 1951 ズミチビタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州）。体長 3.6 mm 内外，*T. auricollis* E. SAUNDERS クズノチビタマムシによく似ているが，瘦型で，顔面の割れが強く，翅鞘肩部の凹みも強い。前胸背の金毛はまばらで時に全く欠き，地色は紫を帯びる。加害植物はズミ，クサボケなどであるが，リンゴ，マメロ，ナンなどの果樹の葉に加害することもある。また西日本ではザイフリボクにつくと云う。この他にもまだ加害植物があるかも知れないが，常にバラ科植物に限られ，マメ科植物につくクズノチビタマムシとは明らかに異なる。白畑孝太郎氏が山形県北村山郡小田島村（現在の東根市）でクサボケから採集した多数の標本と私が福島県会津若松市吹矢山，青木山（奴田山），背炙山などでズミから得た標本に基いて1951年に記載した種類で，種名はズミの異名 *Malus toringo* によるものである。

17. *T. tsushimae* OBENBERGER, 1922 アカガネチビタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州，対馬），中国。体長 3.0 mm 内外，唐金色で個体によって明暗があり，時に銅色を帯びる。この点では和名の「アカガネ」は不適当で，むしろ「カラカネ」とした方が適当であるが，ここでは従来の呼称に従った。翅鞘は一面金褐色ないし金色の毛に覆われ，その中に銀白毛からなる斑紋がある。特に後方2帯



第 29 図 ズミチビタマムシ *Trachys toringoi* Y. KUROSAWA (黒沢, 1959)

紋の形は特異で，両者が会合部で環状に連結しているが，会合線に接することはない。また，触角窩の上方に接する陥凹は深い孔状になる。これらの点で本種は馴れれば同定を誤ることはない。小型の個体は他種と同様に背面の金褐色毛が密になる。加害植物はウツギで同属の植物の多くにもつく。東北地方中部から九州にかけての地域に普通で，対馬にも産し，中国山東省青島産の標本も検したので，朝鮮にも当然産するであろう。私は1959年に本種の同定を誤り，*T. inedita* E. SAUNDERS, 1873 を本種の種名に用いたが，これは前述の様に私の *T. oviformis* Y. KUROSAWA, 1959 マルガタチビタマムシとした種類に用いられるべきで，本種ではない。それでは，本種の種名はと云えば，日本本土から記載されたものでは *T. japonica* OBENBERGER, 1923 が最も古い，対馬から記載された *T. tsushimae* OBENBERGER, 1922 の方が更に古いのでこの方が種名として有効である。私が1959年以降1972年まで *tsushimae* として来たものは後述する様に *tsushimae* ではなかった。あれ程日本で徹底的に採集した G. LEWIS のことであるから本種も当然採集し記載しているだろうと第1回の採集品に基く E. SAUNDERS の1873年の記載や G. LEWIS 自身による1892年の記載を探し廻って，やっとそれらしい記載として拾い出したのが *inedita* の記載で，それには，マルガタチビタマムシの項で述べた通り，先入観も大いに関係していた。大英博物館に残っている G. LEWIS の標本の中にはヤナギチビタマムシの項で述べた通り，同種と混同された1頭の標本があるだけである。和名は，*japonica* にはニホンチビタマムシ，*tsushimae* にはツシマチビタマムシがあるが，共に本種に適当な種名とは思えない。なお，私が1959年に本種と同種とした *T. ornata* THÉRY, 1934 (岡山産) はバリ自然科学博物館にある模式標本を検したが，やはり私の扱いが正しかった。

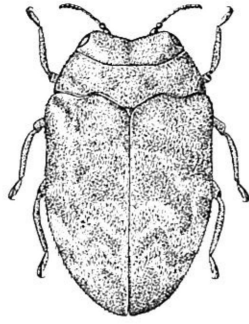
18. *T. variolaris* E. SAUNDERS, 1873 ダンダラチビタマムシ 分布：日本（本州，四国，九州），朝鮮，中国。体長 3.0~4.1 mm，頑強，前胸背の側縁は常に軽く弧状を呈し，翅鞘の地色は黒色，紫色または唐金色を帯びる。翅鞘の毛は淡黄，金褐，銀白の3色からなり，その他に無毛のように見える所には暗色の不明瞭な毛がある。加害植物はミズナラ，カンワ，コナラ，アベマキ，クスギなど落葉性の *Quercus* 属の植物であるが，暖地ではアカガシなど常緑樹にもつく。例によって，原記載にも大英博物館の模式標本のラベルにも共に Japan とあるだけであるが，G. LEWIS の第1回の採集品であるから，長崎付近から神戸付近で採集されたものであろう。東北地方から九州にかけて広く産するが，個体数はそれ程多いものではなく，群がっているのに出会ったことがない。朝鮮や中国にも広く分布し，私は朝鮮の雪岳山，中国の南京，杭州，浙江省莫干山 (Mokanshan)，湖南省新化县などの標本を数頭検した。また，中国山東省膠州 (Kiautschau) から

記載された *T. clavicornis* OBENBERGER, 1919 を私は記載のみから1959年に本種のシノニムと見做したが、1973年にその模式標本を検し私の扱いの間違いなかったことを確かめた。1940年に三輪勇四郎・中条道夫両博士が岡山から記録した *T. clavicornis* も恐らくは本種と同一種であろう。

19. *T. violae* Y. KUROSAWA, 1959 スミレチビタマムシ 分布：日本(九州)。体長2.6 mm, 黒色で多少唐金色を帯びる。翅鞘に不明瞭な金灰色の短毛をまばらに散布するが、後方で不明瞭な2本の帯状を呈し、両方は合合部で連結する。一見 *T. pseudoscurobiculata* クロチビタマムシによく似ているが、やや扁平で、翅鞘の点刻がそれ程粗大でない点で区別できる。黒子浩博士が、1956年に鹿児島県長崎鼻で発見したスミレの1種についていた潜葉虫を飼育し、同年9月16日に羽化させたものただ1頭に基いて記載された種類で、その後の採集記録が全くない。スミレ科のような小草本につく種類があるとは全く意外であった。大陸にも本種に近似した種類は全くなく、九州特産である。

20. *T. yanoi* Y. KUROSAWA, 1959 ヤノナミガタチビタマムシ 分布：日本(北海道?, 本州, 佐渡, 四国, 九州), 朝鮮, 中国。体長2.6~4.2 mm, 地色は唐金色, 時に真鍮色や銅色を帯びる。翅鞘は一面褐色毛に覆われ, その中に銀白毛からなる斑紋がある。小型のものでは褐色毛が淡色になり銀白斑が不明瞭になる。先に記した *T. griseofasciata* E. SAUNDERS ナミガタチビタマムシに酷似するが, 地色が明るく, 毛も明るく, チョコレート色ではなく, 頭楯の幅が狭く, 長さの約1.5倍である点で区別される(ナミガタチビタマムシでは幅広く, 長さの約2倍ある)。詳しくは前号のナミガタチビタマムシの項を参照されたい。加害植物はケヤキ。以前より *T. griseofasciata* E. SAUNDERS, 1873 ナミガタチビタマムシはケヤキにつくと記されて来たが, これは本種の誤である。本州, 四国では各地に普通に時に大発生することがあるが, 九州では少なく, 中央山地に限って産する。北限は東北地方で, 青森県にも産する様であるが, 北海道の産否ははっきりしない。大陸では朝鮮と中国には確実に産し, 私は朝鮮清津, 中国天津, 上海, 南京其他産の多数の標本を検したが, 満洲やアムール産の標本は検することは出来なかった。

21. *T. yoshidai* Y. KUROSAWA, 1959 ヨシダチビタマムシ 分布：日本(九州)。体長2.6 mm,



第 30 図 ダンダラチビタマムシ *Trachys var. violaris* E. SAUNDERS (北降館, 日本昆虫図鑑, 1950)

T. violae スミレチビタマムシに似てやや扁平, 唐金色で多少銅色を帯びる。翅鞘は不明瞭な暗灰褐色毛を散布し, 灰白色毛による斑紋がある。一見 *T. tokyoensis* スズビトハギチビタマムシによく似ているが, 詳しく調べてみるとスミレチビタマムシに驚く程似ていて, 主な相異は体色だけであることに気付く。加害植物はまだ判っていないが, 本種はスミレチビタマムシと同種ではないかと考えている。吉田智昭氏が福岡市東区箱崎の九州大学構内で1953年9月14日に採集したただ1頭の標本に基いて記載されたものであるが, その後これに相当する標本を見たことがない。

22. *T. sp.* コウゾチビタマムシ 分布：日本(本州, 四国, 九州, 対馬), 中国。体長2.7~3.0 mm, *T. inedita* マルガタチビタマムシによく似ているが, やや瘦型で肩部が多少突出し, 頭楯の幅が長さの約1.7倍(マルガタチビタマムシでは約1.5倍)などの点で区別できる。また, 前胸腹板突起の形もかなり異なる。加害植物はコウゾやカジノキであるが, 稀にクワにつくこともあるらしい。1959年に私は本種の種名に *T. tsushimae* OBENBERGER, 1922 を当てたが, 前述の通り *tsushimae* は私が *inedita* としたアカガネチビタマムシに当てなければならぬことが判った。従って本種の種名には目下の所日本から記載されたものの中には該当するものが見当らなく, 中国から記載された種の中にも適当なものがない。恐らく, 本種には新名が必要となるであろう。北は山形県から九州全域, 対馬にかけて広く分布し, そう稀な種類ではない。中国では湖北省黄冈, 湖南省湘潭産(いずれも白畑孝太郎氏採集)の各1頭を検したから, かなり広く分布しているものであろう。朝鮮の標本はまだ検していないが, 将来は多分記録されるであろう。本種も食樹の近くにあるケヤキなどの樹皮下で越冬する。

XII. Subfamily Mastogeniinae ケシツブタマムシ亜科

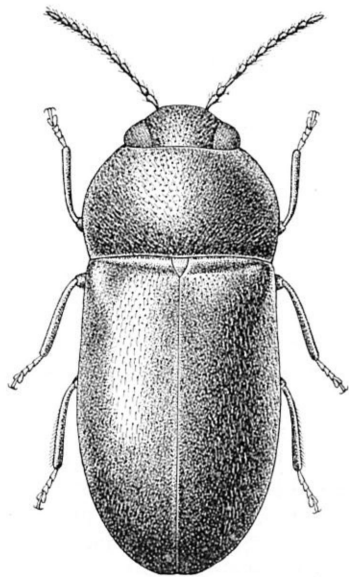
黒色の微小種ばかりを含み, 一見微小なコムツキムシかムクゲクスイの様な感じのする種類が多く, とてもタマムシとは思えないことがある。しかし, 腹部腹板第1,2節は明らかに癒合しており, タマムシ科の特徴を示している。チビタマムシ亜科に近いが, 前胸背後縁が直線状で全く波曲しない点で一見して区別される。小さな亜科で, 全世界に7属を含み, その中の *Mastogenius* と *Micrasta* 属以外は1種ないし数種を含むだけである。また上記2属にしてもその種類は各20種足らずである。大部分は南北アメリカ大陸に分布が限られ, ごく例外的な少数の属や種類がニュージーランド, オーストラリア, アフリカ, マダガスカルなどに産するに過ぎない。ヨーロッパとアジア全域からは, 現生種は1種も知られていなかったが, 1972年に初めて屋久島から *Mastogenius* 属の1種が記載された。なお過去の地質時代には, この類がユーラシア大陸にも生息し

ていたらしく、OBENBERGER はヨーロッパ北部のバルチック琥珀の中から *Mastogenius* 属の1種を記載している。

43. Genus *Mastogenius* SOLIER, 1851 ケンツブタマムシ属

頭部は小さく、複眼は多少頭頂に向けて収斂し、触角は第4節から鋸歯状になる。翅鞘の基部は截断状、側縁は肩部の後方で波曲することなく、ほとんど一直線、背面に毛斑はない。約15種が知られているが、その大部分は南アメリカから北アメリカにかけて分布し、ごくわずかの種類が、アンチル諸島とオーストラリアから知られているに過ぎない。日本からは次の1種が1972年に記載された。

1. *M. insperatus* Y. KUROSAWA, 1972 ケンツブタマムシ 分布：日本（屋久島）、琉球（沖縄本島、西表島）。体長 2.35 mm, 黒色、やや細長、前胸背側縁は弧状、翅鞘の両側はほぼ平行。加害植物は未知。木村裕氏が1960年5月21日に屋久島尾の間で採集したただ1頭の標本に基いて記載されたものであるが、その後、沖縄本島名護から記録され、私は西表島仲間川産（1973年4月9日、田添京二氏採集）の1頭を検した。恐らく琉球列島全域に分布するものと思われる。



第31図 ケンツブタマムシ *Mastogenius insperatus* Y. KUROSAWA

以上で本誌第1号（1968年2月）から続けて来た日本産タマムシ科の解説も一応終了したが、なにしろ、最初に書き始めてから8年も経過しているので、いろいろ訂正しなければならない点や追加補筆したい所も多い。そこで、次回をこれに当てて全部完了したいと思う。
（国立科学博物館）

○ヤノナミガタチビタマムシの大発生

今年(1976)8月19日に東京都青梅市の多摩川の調査に行った折に、河畔のケヤキの葉が黄ばんでいるので、注意してみると、何者かにほとんど葉脈を残すだけくらいに食害されている。以前山形県最上郡及应村でハルニレがニレノミゾウムシ *Rynchaenus mutabilis* BOHEMAN の大群によって同様に食害されていたのを見たことがあるので、このケヤキも同様にノミゾウムシ類の加害と考え、網を枝にかぶせて見たら、入って来たのはなんとヤノナミガタチビタマムシ *Trachys yanoi* Y. KUROSAWA の大群であった。同所にあった数本のケヤキは全部落葉寸前の状態までに本種の大群によって食害されていた。それ以前に東京都庁より都下北多摩郡絵原村数馬で本種が大発生をした旨の報せを受けていたが、青梅市でその大発生の実際に会おうまではこれ程の大群とは考えてもいなかった。その後、9月8日付の朝日新聞にも京都市嵐山でナミガタチビタマムシがケヤキなどに大発生し早紅葉となっているとの記事が出た。これもその文から推察するとやはりヤノナミガタチビタマムシの大発生と考えられる。どうやら本種の大発生は東京ばかりではなかったらしい。本種の幼虫には微小な寄生蜂がつくが、恐らく農薬の空中散布などによる寄生蜂の減少が本種の大発生を誘発したのではないかと考えているが如何なるものであろうか。
（国立科学博物館、黒沢良彦）

○上甌島から未記録の甲虫類（3）

現在まで上甌島産ゴミムシ類に関する報告はオオオサムシの記録以外は全く知られていない。そこで筆者は昨年同島において採集することが出来た下記6種のゴミムシ類を記録しておく。

1. *Colpodes japonicus* MOTSCH. ハラアカモリヒラタゴミムシ
1頭, 里, 28. iv. 1975.
2. *Colpodes modestior* BATES イクビモリヒラタゴミムシ
1頭, 里, 30. iv. 1975.
3. *Amara chalcites* DEJEAN マルガタゴミムシ
1頭, 里, 28. iv. 1975.
4. *Stenolophus quinquepustulatus* WIEDEMANN イツホツツヤゴモクムシ
1頭, 里, 29. iv. 1975.
5. *Anoplogenus cyanescens* HOPE キベリツヤゴモクムシ
2頭, 里, 28. iv. 1975.
6. *Lebia calycophora comitata* BATES ヒメアトキリゴミムシ
2頭, 里, 30. iv. 1975.

なお、末尾ながら同定の労をとられた須賀邦耀氏に心から御礼申し上げます。

（松浦園芸高校、吉田喜美明）

オオキノコムシ科の学名覚え書

中 根 猛 彦

日本のオオキノコムシは中条道夫博士の著 *Fauna Japonica, Erotylidae* (1969) にまとめられているが、最近 S. M. IABLOKOFF-KHNZORIAN (1975) は旧北区のオオキノコムシに対する検索と知見を発表し、中条博士の著書からかなり大幅に引用しながら、一部学名を変更している。私も多少気づいていることもあるので、併せて要点を紹介しておきたい。

Aulacochilus sibiricus REITTER, 1879 = *bedeli* HAROLD, 1880 これは私 (1958) も予測し、中条も同じ種ではないかと述べている。I.-KHNZORIAN は日本産は見えていないようである。なお永井彦氏が採集された九州の個体にはほとんど青藍光沢がないものがある。

Pselaphandra JACOBSON, 1904 (type: *Triplax cinnabarina* REITTER, 1879) = *Tetratriplax* CHŪJŌ, 1969 (type: *Dactylotritoma inornata* CHŪJŌ, 1941) 両属のタイプ種を I.-K. は同種と考えているが、日本産の方が一般に大形のものである。いずれにしても両種はきわめて近いもので、私は後種に用いた属 *Tetratriplax* ARROW, 1925 も恐らく同群かと思われる。

Pseudotritoma GORHAM, 1888 (type: *Tritomidea? nigrocruciata* CROTCH, 1876) 中条も I.-K. もこの属のタイプを *P. pulchra* GORHAM としているが、原著指定は上の種である。いずれにしてもこれらの種は短卵～半球形で強くふくらみ、前胸板(背面ではない)中央は隆起し、前端が尖るということによって日本産の種とはやや異なると思われる。私は British Museum (N. H.) で ARROW がタイプと比較したという *nigrocruciata* を見たが、体が円く短く、前胸板には中央部を囲む条線がなく、触角球稜は細く、末節はあまり横長でなかった。やはり日本産 (*yasumatsui*, *consobrina*, *laetabilis* など) は *Aporotritoma* に含めた方がよいように思われる。

Tritoma FABRICIUS, 1775 = *Cyrtotriplax* CROTCH, 1873 この両属はタイプ種が同じ *bipustulata* FABRICIUS であるが、はじめの *Tritoma* が実はオオキノコムシでなかったとして中条は *Cyrtotriplax* を採用した。しかしコキノコムシでも現在 *Tritoma* は用いられておらず、一般には *Tritoma* はオオキノコムシとして用いられている。I.-KHNZORIAN も *Tritoma* を用いているが、*Neotriplax* LEWIS, 1887 も同属に含め、*N. atrata* LEWIS, に新名 *T. atratula* I.-K. を与えている。

Tritoma fulva (REITTER, 1879) = ? *Rhodotritoma sufflava* (LEWIS, 1887) I.-KHNZORIAN は両者のタイプを見て同種であるとし、さらにこれ

を *Tritoma* に移している。*sufflava* を *Rhodotritoma* に移したのは荒木東次 (1942) であるが、確かにこの種に関しては前腿節下縁の顆粒列の存在を除くと、*Triplax* との区別は難しいように思われる。*Tritoma* とは違うと思われるので、果して *fulva* が真に *sufflava* と同じかどうかやや疑いがある。

Cryptophilus REITTER, 1874 現在オオキノコムシ科からコメツキモドキ科に移す方がよいとされているが I.-KHNZORIAN は前科に含めており、検索を示している。

Itotomarus glisonothoides (REITTER, 1874) *Cryptophilus* に入れて記載され *Toramus* として図説されているが、上記の属に含まれるらしい。

Cryptophagus quadrisignatus MOTSCHULSKY, 1860 I.-KHNZORIAN はこの種に対しウスリー産の Neotype を指定した。しかし、この個体は記載とやや異なるし、モスコウ大学動物学博物館には type と思われる標本があり、*Cryptophagus* と *Cryptophilus* の両方があることは既に述べた通り (昆虫と自然 7-10. 1972) で、この指定は無効と思われる。多分原記載は *Cryptophagus* の個体でなされたと考えられるから、できればそのように Lectotype をきめたいものである。

Cryptophilus reitteri I.-KHNZORIAN, 1975 *C. propinquus* REITTER と同じ針にさしてあった 1 頭をタイプとして記載された。この属の種はいずれ調べなおす必要があるであろう。

(国立科学博物館)


○オオヒョウタンメダカハネカクシの採集例

オオヒョウタンメダカハネカクシ *Dianous shibatai* は 1960 年、沢田高平博士によって八ヶ岳稲子湯を模式産地として記載された種で、原色昆虫大図鑑 II (1963, 北隆館) にも図示されている。しかし原記載後の採集記録は極めて乏しく佐藤光子 (1968, 岩手県産鞘翅目仮目録第 1 号, P. 12) によって岩手県川井村区界が、また黒沢良彦・白畑孝太郎 (1969, 朝日連峰総合学術調査報告, P. 199) によって山形県朝日連峰大井沢峠が分布地として記録されているに過ぎない。このことは本種の生息場所が不明瞭なことに無関係ではないと考えられるが、筆者は今夏多数の本種を下記の如く宮城県蔵王山において採集することが出来たので報告しておく。

なお、これら採集個体は全て溪流の中や際の岩石上で、しぶきで濡れている苔の中に生息していたもので、苔をはがして水溜りに浸すか、あるいは苔に水をかけるかしてはい出して得たものである。

12 頭, 後鳥帽子, 10. vi. 1976; 20 頭, かもしか温泉, 24. vii. 1976. (仙台市, 渡辺 徳)

OF
I
シ
ROS
ネ
云
た
の
日
で
P
キン
ア
で
近
本
た
と
云
方
た
今
1
1
採
オ
含
派
い
davi
が
この
のか
ない
オニ
採集
あれ
られた
の敬
なホ



キン
右: 草

○日本未記録のクワガタムシ

日本産のクワガタムシ科は、最近記載されたヤクシマオニクワガタ *Prismognathus tokui* Y. KUROSAWA, 1975 を加えて31種、このうち琉球列島のネプトクワガタを細分すると2種増して33種となる。云うなれば、従来知られていた種類を多少増ししたに過ぎない。ところが、ここに従来知られていたどの種類とも誰が見ても全く異った驚異的な種類が日本産として登場することになった。即ち次の種類である。

Prismognathus dauricus (MOTSCHULSKY, 1860)
キンオニクワガタ

アムールより記載された種類で、この属の基本種であるが、満洲から華北、朝鮮にかけて分布し、最近になって済州島にも産することが判った。模式標本は♀で、*Metopodontus dauricus* として記載されたが、♂の方は同時に *Prismognathus subaeneus* と云う新属新種で記載された。しかし、♀の記載の方が1頁先であったので、♀の種名が残ることになった。

今回日本から記録される産地は下記の通りである。

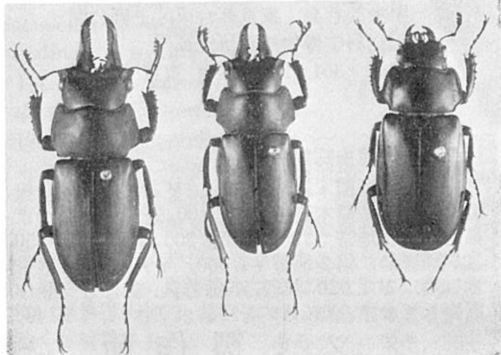
1♂, 対馬上島香木山, 1. ix. 1973, 渡辺 徳採集。

1♂, 対馬下島竜良山, 4. viii. 1973, 渡辺 徳採集。

オニクワガタと同属であるが、より大形(大腮を含む♂の体長20~35mm)で、大腮がずっと長く立派である。華中から記載され、最近台湾の高地にもいることが判った、タイワンキンオニクワガタ *P. davidis* DEYROLLE, 1878 によく似ているが、大腮がより細長い。

この様な大型種がなぜ今まで知られていなかったのか不思議であるが、恐らくは、余り採集者の入れない深山にのみ残存し、そのうえ、発生期が日本のオニクワガタと同様に8月から9月にかけてで晩く、採集者の余り訪れない季節であるためであろう。とあれ、日本のファウナにこの様な大型の甲虫を加えられたことを慶ぶと共に、採集者渡辺 徳氏に深甚の敬意を表したい。

なお、対馬のクワガタムシについては、もう1種



キンオニクワガタ 左: 香木山産♂ 中: 竜良山産♂ 右: 朝鮮雪岳山産♀

日本のファウナに加えられるかも知れない。対馬からはまだミヤマクワガタ類の記録がないが、九州大学農学部所蔵標本の中に対馬下島内山産の一頭の♀がある(25. vii. 1930, HORI & CHO 採集)。一方朝鮮半島にはチョウセンミヤマクワガタ *Lucanus dybowskyi* PARRY, 1873 が広く分布している。この種類は日本のミヤマクワガタの♂の大腮の基部の歯の長い型 f. *nakanei* Y. KUROSAWA, 1976 によく似ているが、額上の上方向に突起がない点で区別される。しかし、♀では両種を区別する明瞭な区別がない。従って、1♀だけでは対馬のミヤマクワガタが、日本と朝鮮のどちらの種類に属するか判定することは困難である。将来、対馬でミヤマクワガタの♂が採集された折にそれがチョウセンミヤマクワガタである可能性も大いにあるわけである。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

○アヤフヒゲナガゾウ石垣島に産す

アヤフヒゲナガゾウ *Litocerus communis* JORDAN は台湾に産し、我国においては奄美大島より奄美亜種 *L. communis amamianus* SHIBATA が知られているのみで、同島以外からは原亜種、本亜種ともに採集報告はない。

筆者は石垣島にて、本種を採集しているので報告しておく。

1♂, 27. vii. 1976, 高橋隆信採集; 5♂♂3♀, 28. vii. 1976, 筆者採集。

上記の個体は、倒木(樹種不明)および衰弱木に生じた菌類に飛来したものを採集した。

石垣島産の本種は原亜種と奄美亜種の中間的な形態で、上翅斑紋、体色ともに両亜種とは異なっている。(和歌山県有田郡, 的場 績)

○山梨県日野春でオオキノコゴミムシ採集

オオキノコゴミムシ *Lioptera erotyloides* BATES は一般に稀なゴミムシとされているが、山梨県の低地で採集されたので報告しておく。本種の太平洋側の採集例は珍しいものとのことである。

3頭, 山梨県北巨摩郡日野春~穴山間, 1. viii. 1976, 高桑正敏・小野直史採集。

クヌギ林を夜間見回って、太いクヌギの衰弱木の根元近くに静止しているものを得た。この衰弱木に菌類の付着は認められなかったが、上方には樹液が出ており、あるいはこの樹液に集まったものかもしれない。(神奈川県高座郡, 小田義広)

○ニセベニコメツキの記録

ニセベニコメツキ *Pleononus makiharai* ŌHIRA は、横原寛氏が1969年4月18日に西表島のゴザ岳で採集された1雄個体に基づいて翌年大平博士によって記載された種であるが、その後の記録はない。しかしながら筆者の手許には未記録地から採集された本種の雌の個体があるので報告しておく。

1♀, 沖縄本島与那覇岳, 21. v. 1976, 小笠原隆採集。

末筆ながら貴重な標本をご恵与下さった小笠原隆氏にお礼申し上げる。(東京農大, 鈴木 互)

○標本害虫異変

私は職務がら年中昆虫標本を相手にしているが、いつも困らされるのはヒメマルカツオブシムシ *Anthrenus vrbasci* LINNÉ である。ちょっと油断すると容赦なく針とラベルだけの無残な姿にしてしまう。しかも、被害を受けるのは大抵珍品ときているからたまったものではない。ところが最近になって、ここに新たな害虫が加って来た。ジンサンシバンムシ *Stegobium paniceum* LINNÉ である。この種類は以前から乾燥した植物質を食べることが知られており、朝鮮人蔘、大黄などの高価な薬草を食い荒すので、またの名をクスリヤナカセとも云われていた。従って植物標本の大害虫でもあったが、加害対照物は植物質のものばかりで、動物質のものを食べる例は知られていない。ところが、最近になって、私の室でこの虫が昆虫標本につきだして困っている。ヒョウホムムシと異って針を刺した標本につくことは余りなく、もっぱら三角紙包みの標本や展脚板に載せてあるものに限られるが、蝶などでは展翅板にある間に翅の基部や板上の翅脈を食い荒すので台なしになってしまう。以前に、これも余り標本にはつかない、コクヌストモドキ *Tribolium castaneum* HERBST が三角紙包みの標本について大被害を受けたことがあるが、これはいつの間にかいなくなってしまう。シバンムシの方も早くいなくなることを希望しているが、近くに供給源があることもあってなかなかいなくなるらない。

これとは逆な例に、ナガヒョウホムムシ *Ptinus japonicus* REITTER が大豆についた例やヒメヒョウホムムシ *Ptinus hirtellus* STRUM が油脂についた例などがあるが、ヒョウホムムシ科の種類は植物質にもつくことが知られているから、それ程特筆すべきものではないであろう。大豆などの蛋白質は虫にとっては動物蛋白と同様であるのかも知れなく、私は1946年に海水に浸って腐敗した大豆を乾かしたものに多数のルリエンマムシ *Saprinus speciosus* ERICHSON, マルマメエンマムシ *Gnathonus nanus* SCRIBA, アカクビホシカムシ *Necrobia ruficollis* FABRICIUS, ルリホシカムシ *Korynetes coeruleus* DEGEER など、通常は乾燥した動物質に来る甲虫が多数来ていたのを見たことがある。

(国立科学博物館, 黒沢良彦)

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号 (各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

=＜連絡・報告＞=

◇採集会報告 本会初の試みである採集会は予定通り7月23～25日、宮城県蔵王山かもしか温泉を根拠地として実施されましたが、その折には下記の22名の方々が参加されました。幸運にも採集期間中は連日の好天に恵まれ、参加者それぞれが少なからぬ珍品稀種を採集することが出来、全員満足の体で帰途につきました。中でも若年の某タマムシ愛好者は前日他の採集者におさえられたエサキキンヘリタマムシを採集するため予定のバスを遅らせて炎暑のもとでの大奮闘、その結果かくかくの戦果を収め満面微笑をたたえての御帰還だったとは、上野駅で偶然出会った会員からの話でした。

なお、この採集会実施に当っては本会々員の渡辺徳氏に一方ならぬ御世話になりました。ここに改めて同氏の御厚情に対し心から感謝申し上げます。



参加者氏名 (ABC順, 敬称略)

阿部光典, 秋山黄洋, 笠原須磨生, 川辺 湛, 小池寛, 小宮義璋, 小宮義行, 黒沢良彦, 森田誠司, 桜井 精, 妹尾俊男, 清水昭平, 篠原明彦, 白畑孝太郎, 須賀邦耀, 鈴木英夫, 竹内尚徳, 田野口康彦, 塚原一秀, 渡辺徳, 渡辺泰明, 渡辺義汎。(渡辺記)

甲虫談話会

会費 (1カ年) 1000円, 次号は12月中旬発行予定, 投稿メ切は11月15日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動研究部内

電話 (364) 2311, 振替 東京 60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥ 4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥ 1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3箇以下 ¥ 1,200, 4個以上 ¥ 850 (以下同様), 第2地帯 ¥ 1,400, ¥ 950, 第3地帯 ¥ 1,600, ¥ 1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作販売しています。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547